

仕事をもつ祖母のジェネラティビティの語りから一子育て支援を考える

加藤 邦子 (浦和大学)

1. 本研究の目的

エリクソンのジェネラティビティについて、コトール・J. (Kotre, 1984; P7-9)は、「自己形成に関わる概念で、自己の延長である人生や仕事の内容を投入したいという動機」と再定義しており、ジェネラティビティを捉えるためには、対象者がその出来事をどう語るかを用いる方法が適切であるという。

祖父母は、親が妊娠期以降に頼る子育て・子育て支援の担い手である。特に祖母は孫の出産から、娘、息子、孫と新たな関係を築くことを経て、重要な支援者となると考えられる。最近では、仕事をもつ女性が増え、定年延長傾向にあり、祖父母世代は、仕事を持ちながら娘・息子の子育てや孫の子育てを援助する。そこで祖父母はどのような体験をするのか、孫育て及び自分の子どもが親になる過程を援助する際の体験を取り上げることに意義があろう。深瀬・岡本(2010)によれば、老年期のジェネラティビティの様相とは、〈一歩引いた立場に徹する〉、〈次世代の平安を願い、案じる〉、といった立場から、「残す」「守る」「案じる」という様相を示し、そのような立場に満足感をもっているという。仕事をもつ祖母はその娘の養育を援助する際、孫育てに自分をどのように投入するのか、ジェネラティビティに関する語りを捉えて明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、祖母と孫とのかかわり、祖母と娘のかかわりをインタビューによって捉え、ジェネラティビティの様相について明らかにする。

協力者: 未就学の孫とは別世帯で、孫育てにかかわる有業の祖母(年齢 58 歳～73 歳) 6 名。

インタビューの時期: 2017 年 11 月～2018 年 2 月。

調査方法: ジェネラティビティに関するインタビューガイドを作成して、聴き取り調査を実施した。協力者は「同意書」に署名をし、さらに IC レコーダーへの録音の許可を得た。各々 1 時間ずつインタビューを記録した。協力者の語りのテープ起こしを分析対象として、初期条件、特徴的な経験の違いについて分類を行い、ジェネラティビティに対応する事象に関する語りを抜き出し、語りの主題ごとにとめて分析や比較を繰り返した。

3. 結果

娘夫婦の状況、孫のきょうだい関係によって、提供する援助が異なっており、娘が仕事に行っている間に孫の世話をするような援助や、孫が幼稚園から帰ってから、夜寝入るところまでの孫の世話を引き受けるといった援助がみられた。娘に歓迎される援助やこうしてほしいという要請もあり、背景には相互依存的関係があると推測される。孫には自分の考えを直接伝えるという語りはあったが、祖母は養育者から一歩引いた立場から、孫が楽しいと感じることに重点を置いていた。孫が祖母といて楽しくできるのは、子育て中の母親の上手な子育てがあつてこそという認識をもち、養育者として娘を尊重する語りが見られた。孫が飽きないように配慮する場面、孫にせがまれておもちゃを買うなど、一歩引いた立場であるからこそ、孫の甘えを許容するとしている。

祖母たちは、自分の仕事を終えてから、休みの日に娘の援助、というように、できる範囲で仕事と援助を両立している。自分の仕事を終えて、孫の通う保育園に迎えに行くことが可能な距離に住むなど、仕事と援助が両立できるような生活圏を整えているという語りがみられた。

4. 考察

6 人の祖母はいずれも、孫をめぐる娘の子育てだけでなく、自分の子育てへの振り返りや自戒を込めて語っていることがわかった。援助は、一方通行ではなく、世代間における相互的表現である。祖母自身が当時の子育て方法をめぐる葛藤があつて、娘に伝える努力をしている。

キーワード: ジェネラティビティ, 祖母, 娘, 孫